

眞生

第九卷 第十號

□各地を廻つて一番私に感ずるのは近頃の人々に何となく落ちつきの無くなつたことあります。世の人はその原因を生活の不安に歸する。

□乍然その生活の不安が何に歸するかをあまりに研究する人はない。

□金さへあればと云ふのが先づ多くの人の考へであらう。乍然金さへあればと思つたとて、まさかその爲めに他から金が流れこむわけではないのに、人は何故に金が欲しいなら、それを儲ける方法をしないであらう。

□今日の世の中は不景氣不景氣と云ふのみで、不景氣が獨りで無くなるものではない。況んや各自が不景氣に襲はれて、たゞそのみを恐れても、決して不景氣は立ち去るまい。

□それに私の考へでは今日の不安は主として各人の修養のないところから来る一種の大きな不安ではないかと思ふ。所謂本當の生活の困難から来る人心の不安ではなくして、反つて未だ身心が生活のさんならまで墮ちてゐないところから来る不安である。

□人は愈々食ふにも困り、住むにも困つて來るときは何とか仕やうとするものである。それを何とも仕やうとしないで、之ではいかぬと心配することはそれは單なる杞憂であつて、決してそれは本當のものではない。

□寢るにも食ふにも衣るにも困つて、愈々人間がその生活に追はるゝならば今日の社會は今少しくは落ちつくのであらうのに、今日の社會は未だそこまでは至つてゐない。

□然に多くの人々がそれを知らずして徒に不安にかられるのは未だ本當の人とは云へない。之は主として私共に未だ充分の信仰心がないからである。

（念）

目次

比丘の口

『物』でなく『者』にな

れ 魁子

現代の佛教 土屋觀道

スープに浮ぶ脂肪 南無耶

唐澤別時座談會拔書(一)

愚民子

吾朋便り

比丘の口

或日、佛弟子迦旃延比丘が軒毎に托鉢して居られました。その尊い姿を見て長者の一人が供養したいと思ひ家へ請待して、大變な御馳走を振舞ました。すると迦旃延尊者、返りがけに

「御蔭で、十分腹がふくれました」

とお禮をのべて、靜々と出て行かれました。二度目又、御馳走しました。けれど其時も

「お蔭で、十分腹がふくれました」

と、云はれるだけで「さうも御馳走様になりました有難う御座いました」なご、御禮を云はれぬ。

長者が御馳走が旨くなかつたのかと思ひ訊いてみました。すると尊者は、たゞ一言

「比丘の口、釜戸の如し」

と仰せられました。何を食つても、何を放り込んでも旨いまづいを云はんと云ふのでせう。これを聞いて長者は啞然として返へす言葉もありませんでした。

其長者は、取り分け、食べ物に旨いまづいの小言が多かつたから、此の態度と、此の一言で、たしなめられたのでせう。(魁)

『物』くなく『者』になれ

□お念佛すればする程、「お念佛が足らぬ」と感じます。

□ソレハお念佛して居らぬとわからぬが、お念佛してみると、いよくよくわかります。それはなぜかといふと、お念佛してみると、「お念佛」が潮の満ちて来るように、自分の内へ充ちて来て下さいませ。するとハハーン、今迄は餘程氣張つてやつてゐるつもりだつたが、此の「力」に充たされてやつてゐたのではないナ、矢張り、威張つてやつてゐた丈で、本當の「力」からやらされてゐたのではないわいと氣がつかます。そして自分のやつてゐたこと、が如何にも輕はづみで、獨斷であつたことが恥づかしくなります。

□お念佛は、死んでから先の事だとか、縁起が悪いとか云ふが、それは一体何のことだ？

□お念佛は、生きてる間、此の仕事を上にしてはならぬ要素です、資本です。金があつても金を動かす元の動力が無ければ死金です。人があつても人を動かす元の志が無ければ木偶の坊です。私には自分も本當の働きをします。

□此の「中心」からでないと、物が本當の方へ動きません。自動車の上に人が居つて、その人が操縦すればこそ、自動車有難い役をします。エンヂンばかりが獨り廻りして走るのなら、こんな危険な物はありません、即ち「物」が「者」になるのは、此の中心に人があるからです。私達の事業も私達自身も、「物」であつてはならぬ「者」でなければならぬ、それが爲めには常に中心に、「眼」となつて光り、「動力」となつて働いて呉れる「お念佛」、が活き／＼として動いてゐて下さらねばいかぬのであります。

□此の「念佛」は何處から仕入れて来るか。

□それは既に法界に満ち満ちて居ります。自分が「眞剣にやらう」と決心した時、胸の裡へ溢れ返つて來ます。「さうかして成就して下さい」と願つた時、お念佛の方から私の内へ這入つて来て、私を導いて行つて下さいませ。弱き者悩める者にこそ一層よくお念佛が現はれて下さいませ、そして強き者勇める者にこそ、ます／＼その働きを顯して下さいませ。我々にはまだ、お念佛に充たされ方が足らぬ。

(魁子)



現代の佛教

土屋 觀道

一、二 大 潮 流

□現代の佛教は之を大別すれば二つの大きな潮流をなして居ります。それは從來のまゝの既成佛教としての各宗各派の流れなるものと、今一つはそれらの宗教を越えたる一つの新しい一種通佛教とも云ふべき新宗教の運動であります。而も亦この二大潮流の中にも更に詳かく之を分けてば更に幾多の小さい潮流となつてゐるものがあります。

□然ば此の二つの潮流は目下どんな傾向にあるかと云へば今日のところ時代の變遷につれて、所謂既成佛教も昔のまゝでは立ち行かぬので、時代の思想に合流すべく其の説明を變へやうとしてゐます。

□之は主として、其の佛教を守る僧侶の方でも段々時代が變るのと、それと同時に新しい現代の教育を受けた人も多くなるので、其の時代に應じた思想や信仰でなくては自分の信仰としても立ち行かなくなるし、又時代の人々も之を受け入れてくれないからにやうと思ひます。

□乍然從來の既成佛教は己に封建時代に其の宗學が完成してゐるものが多いので、之を現代的に解釋することは可なり困難な點が多いのでありますが、殊に近頃の根本佛教の研究は其の改正の必要を既成佛教の上には感じてゐるやうであります。

□従つて、今日の既成教團なるものも、此の二の方面から可なり反省を促がされてゐるのであります。此の點二派に分れてゐる傾きがあります。即ちその一は從來のまゝで改造などを試みない人々の集りで、今一つは此の原始佛教を通じて反省しつゝ今までの既成宗乘を現代生活に合せやうとする一派であります。

□而て、之が前者の人々から異安心と云はれる人々であり、前者が後者の人々から、古典學者だの、古典宗學と云はれるものであります。

□乍然それにしても、現代の既成宗教は少くとも現代の社會生活と相一致せぬ點が可なりに多いこととて、少くともそれらに對して少しの反省も加へずして、今後立ち行くかどうかは大いに考へられねばならぬ點であります。

二、新しき佛教運動

□之に對して、新しい一つの運動は所謂宗教改革の運動であります。而て之にも亦二つの傾向がありまして、一つは從來の既成佛教の中から自分の宗旨こそ、即ち釋尊に叶つたものであり、又それが現代の社會生活を救済するものであるとして立つたものと、今一つは全々それらの既成宗教を離れて、釋尊の根本佛教によつて自ら活きやうとする一派であります。

□前者は現在の既成教團の中から、各自の屬する宗旨を中心として、一方には原始佛教にその典據を求め、一方にはそれを現代生活に合はすべく一つの注釋を試みるものであり、後者は全く釋尊中心の原始佛教に自己を活かさうとするの運動であります。

三、原始佛教と現代

□ところが、原始佛教の研究は恰もその佛教發生の時代が封建時代と云ふよりも、寧ろ之を開放して

民衆本意の宗教的立場にあつた關係上、私共の生活には非常に都合のよい教が多いのであります。

□尚そればかりでなく、從來の佛教が永い間には他の思想や信仰が混入したため、可なり佛教本來の根本思想が誤まれ、且つまた、時代思想の變遷につれて、可なり佛教の本質が變つたのが、今や佛教の研究が新たな意味に於て、釋尊の宗教を傳へることのできるやうになつた感があります。

□それも、今日の既成佛教が現代生活に一致するものならば、今更ら新佛教を要求する必要もないのであります。封建時代に完成せられた舊佛教が今や現代を救ふことができない以上、新しき佛教の研究がかうした方面に一つの新しい運動を試みるやうになつたのも亦當然のことであります。

□従つて現代の若き佛教徒の中には從來の既成佛教に屬したり、或は又、從來の既成佛教に新しい解釋を試みて、無理にその信仰を自分の生活に合せようとするよりも、寧ろそれらの試みを悉く放鄭して、直に自分の生活を原始佛教によつて、之を指導しやうと試みるものが多いのであります。

四、第三 佛教

□乍然又一面から考へれば釋尊の時代と現代とが己に二千五百年も隔てゝゐることとて、人類の生活が釋尊當時のやうにして生活して行けるかは大なる疑問であり、又その時代と處との相違は必ずしも、釋尊當時の思想や信仰で一切が行けるものでもありません。

□こゝに至つて、佛典の研究も、たゞ單に原始佛教の研究のみで止まるものでなく、一度原始佛教の研究が或る程度まで明かにせらるれば、其の結果として、原始佛教の流れが、いかにして今日の幾多の思想や信仰の分烈を來たしたかを研究するに至るべく、そしてまた、そこにはそれに相當する充分の理由も明になることでありませう。

□この意味に於て、人類の思想信仰の發達も認められ、又それに伴ふ民族の習慣、風俗も考慮に入れ

て、現代の生活に一致すべき眞實の宗教が現代に現はるべきことも亦決して否定すべきものではありません。

□而て、此の傾向は已に今日の佛教研究がそこにまで着眼し、又その見地からそこに一つの新たな宗教が現はれやうとしてゐるのであります。之を今日の淨土宗に望むれば椎尾博士の共生會の如きがその感を深ふするものであります。そしてまた、辨榮上人の光明主義の如きも亦その流れの一派と云ふことができるのであります。

□たゞその二者の異なる所は前者は主として原始佛教にその根據を置き、後者は主として法然上人の淨土教をその根底とした感が深いのであります。

□その他各宗を望むればかうした試みが各地に興らうとしてゐることは、少しくそれらの方面に心を注ぐものゝ常に知るところでありませう。

五、社會生活と新宗教

□然は今後の宗教はどう云ふ具合に變化して行くことでありませう。それについては少くとも私共の注意すべき二三の點があるのであります。

□その中でも最も重要なものの一つは、所謂社會生活と其の人類の思想信仰との關係であります。このことは已に社會主義一派も常に言ふところでありますが、私共の思想信仰と社會生活とは常に離すべからざるものであります。多くの人々はともすればこのことを全く閑却して居るのであります。

□而も、思想信仰の發生が社會生活のそれよりも早いかどうかと云ふ點に對しては、實際の事實は社會主義者の云ふやうに、社會生活の方がその社會の思想信仰よりも早いやうであります。

□従つて、このことは一つの社會に新たな思想信仰が起つて來る場合、そのよつて來るところを見

ますれば多くの場合、その思想信仰はそれ以前、社會組織の變遷によつて、從來の思想信仰では當時の民衆が生活し得ないときに起つてゐるのであります。

□否、少くともさうでない限り、新なる思想や信仰が一たん外から輸入せられて來たとしましても、その民族の生活は之を吸収することをしてないのであつて、その思想や信仰がその民衆の中に入ることはないのであります。従て一時それが入つて診らしいとしてもはやされる時がありまして、それは一時の流行にすぎぬものであつて、決して永き民族の生活となることはできぬものであります。

□之に反して、社會民衆の生活が從來の思想や信仰ではどうしても生活がせられないと云ふほどにその社會の狀態が變化して來ました場合、民衆の心はさうした思想や信仰は寧ろ自分の生活が遠ざからうとするのが本當でありませう。

□さうしてまた、かうした場合、民衆の上には更に新たなる思想や信仰を闇に求めて止まぬものがあるのであります。従つてその結果は私共の思想信仰は此の要求を充すべく更に新たなる思想や信仰を創造して來るに至るのであります。

六、反動思想とその大勢

□ところが社會は必ずしも同じ階級のものばかりがあるのではないのであります。従つて、或る方面ではそれらの新しき思想信仰と云ふよりも、反つて昔のまゝの思想や信仰の方が自分の思想や生活を満足するものがないとは限りません。それが佛教では所謂既成佛敎の古い一團であります。

□乍然それにも亦一理あることであつて、それらの人々の云ふところを見れば亦同情すべき點もないではありません。其の人々の考へには自分の宗旨尊しの考へもありませうか、自分の屬してゐる宗旨の祖師を尊むあまり、その宗の教義も亦之を尊重して行かうとするのであります。

□そしてまた、その方が自分の屬してゐる社會階級の關係もあつて、生活の狀態が多くの場合、新興民族と相反したる立場に居る人が多いのであります。

□けれども多くの場合、之等是一種の新興民族に對する反動思想に過ぎないものでありまして、早晩何等かの形に變つて行くものでありまして、決して永く今日のまゝであるものではありません。

七、新興民族とその宗教

□此の意味からすれば新しき思想信仰は正しく來るべき新興民族の思想信仰とも云ふべきものでありまして、古來幾多の宗教もその開宗の當時に於ては恐くは新しき思想信仰として、當時の新興民族に要求せられたものでありましたらう。そしてまた、その代り當時の舊き思想や信仰の持主たる舊い階級の人々に排斥せられたことも事實であります。

□乍然、宗教が人類の社會に發生する限りかゝる宗教闘争も亦止むを得ないことでありまして、人類生活の止むを得ぬ悩みであります。

□而て此の意味から云へば現代の社會生活は少くとも昔のまゝの宗教や信仰では満足ができないのが本當であります。之は從來の宗教が悪いからではなくて、社會の狀態が然らしむるものであります。それは封建の時代と今日の時代とがその生活の様式を全く異にするからであります。

□そしてまた、之を嚴密に云へば今日の社會は更に資本主義社會と社會主義社會との思想闘争の時代に遭遇してゐるのでありますから、それらに於ける各人の社會意識も多少異なるものが多いが爲めに、之に對する宗教の思想信仰も之に應じて各々相違する點が多いと思ふのであります。

□乍然、古來天下の大勢は民衆の力に反抗することを許しません。従つて、永い間の歴史はそれらの反抗もいつしか押し流して、所謂大衆の時代が段々展開して行くのが今までの事實であります。

□従つて、此の意味からすれば今までの貴族佛教が民衆の佛教となり、今までの有閑佛教が今日の活動佛教となつて來たことも事實であります。そしてまた、今までの死後の佛教が現實の佛教となり、單なるなぐさめの宗教が力の宗教となつて來たことも事實であります。

□言換れば現實を離れた今までの宗教が反つて現實に乗り出して、あくまでも現實を離れず、而も現實に執せずして常に現實を指導しやうとして現はれて來たのであります。之に對して從來の佛教は全く現代の社會には顧みられない有様となりました。

□乍然それだからと云つて、之等の佛教がすべてに於て悪いと云ふものではありません。たゞそれは封建の時代に於て、封建に適すべく封建時代に說かれたる佛教なることを知るに到れば、少くとも現代に於てはそれらの餘弊を捨て、之を現代に活かすことができるであらう。

□さうして、又更にその心を以つて再び現代を見直したとき、今日の社會は今日のまゝでは止まるべきものでなく、この民衆の行くべき所は人類の理想として之を指導すべきであらう。

□而して、その指導に當るものが來るべき民衆の身方として、その民衆の自覺を促す思想信仰である可きは云ふまでもないことであらう。

八、宗教生活と眞生主義

□而て、それは亦生活の中心となり、活動の源泉となつて、民衆の新生に生くべき心の光りであることもとよりであります。げに新たな眞實の宗教は千古萬古、天地と共なる民衆の身方として民衆を永劫に生かすべき力の宗教でなくてはなりません。

□この意味に於て、私共の宗教は正にその尖端を爲すものであります。而て多くの宗教は此の宗教の出現の爲めに、その宗教の前提となり、またその宗教の前衛にすぎません。こゝに新人の要求はかく

てまた眞人の世界を要望して止まぬものであります。

□而て、此の意味に於て、天地の心は又民衆の心を通してこの世に現はれ、常に新に、日々に新に、新しき眞實の生活を開拓して、永劫に生き行くのであります。(一九三〇、一〇、九)

『スープに浮ぶ脂肪』

南 無 郎

「經濟往來」十月號中のルムベン・インテリゲンツィヤ論を読んで、日頃感じて居る所を更らに強く感ぜざるを得なかつた。「スープに浮ぶ脂肪」とはルムベン・インテリゲンツィヤを揶揄した言葉であつて、ルンペン・インテリゲンツィヤとは放浪的智識階級と譯くさるべき言葉である。是れはルンペン・ブルジョアとも言はれ、即ち中小ブルジョアをさしたものであつて、彼等が社會的總生産過程に於て、單なる消費者として、なまけ者として、スープに浮ぶ脂肪のごとく浮動して居ることを言ふたのである。資本主義の發展は益々巨大なる資本の集積を必要とした爲めに、株式會社組織を極度に發達せしめた。その爲めに、大ブルジョアは中小ブルジョアの産業支配權を奪つて、彼等を利子寄食者とならしめ、社會の生産過程から彼等を追ひ出した。中小ブルジョアはこゝ

に於てスープの中に浮ぶ脂肪のごとく不用に歸してしまつた。

而して彼等は凡そ社會的なものに興味を持たない。唯消費生活があるのみとなつた。彼等は徹底的なエゴイストであり、利己的享樂が一切である。カフェー、麻雀ダンス、ゴルフ等が彼等の重要な關心事である。

× × ×

ルンペン・インテリゲンツィヤ論は、猶頗る詳細に論じられてあるのだが、大略右に述べた如くマルキシズムの立場から、氣樂そうに暮して居る中小ブルジョアを痛烈にこきおろして居るのである。私は是れを讀んでさうゆう感を起したかといふと、中産階級智識階級といはれる者の大部分が、このルンペン・インテリゲンツィヤの生活を意識的に、或は無意識的に憧がれて居るのでないか

と云ふ点にある。プロレタリアに於てさへ、個人的感情の中にはこれに對する憧れがひそんで居るのではないかと思はれてならない。

自分も一個のサラリーマンとして正にかくのごとき者であつた。妻もさうである、隣人もさうである。世間一般がさうであると思へない。而して、此の頃のやうに不景氣風が吹きまくつて居ると、益々その感を強くするばかりである。

國家を支持するものはないといふても中産階級であり智識階級である。マルキストはこれ等の階級の没落して無産階級となるの日近きにあるやうに言ふて居るが、現在の日本に於ては、純プロレタリア及び純ブルジョアだけを計算すれば全弊の一割に達せないと言はれて居るではないか。此度の國勢調査に於て日本の總人口は九千萬人に近いと謂はれて居るが、しからばその中間階級と目さるゝ八千萬人近くの大衆が、微少な兩階級の間にはさまつて兩方から馬鹿にされるのであつたならば、誠に滑稽の至りと言はなければならぬ。

ルンペン・インテリゲンチヤを憐れむる者は、それ自身の中に徹底的なイゴイズムを持ち、利己的享樂氣分を有するに違ひない。巨大なる多數が凡てこれであつたならばマルキストの言を待つ迄もなく、これ等は没落の

運命を荷ふ者と言はなければならぬ。享樂氣分さへ起こし得ざる貧しき中産階級、智識階級はこれと反對にプロレタリア意識を生ずるに至るが、此の論文の筆者はそれ等の者が無産となつても、是をルンペンプロレタリアと稱して、眞のプロレタリアとなることは出来ないと言ふて居る。誠にさうであらうと思ふ。中産階級、智識階級がかくの如くであつたならば全く安定をかいて居る。安定なき所にさうして力が生じよう、力を發揮することが出来る。現代に於て絶對多數が如何に恐るべき力を發現し得るものであるかを知らざる者はないであらう。然るに絶對多數を擁する中間階級がこれを自覺せず、此の力を我れ自からの内に養ふ事を敢てせず、従つてブルジョア、プロレタリアを止揚して更に一段高き文化を建設せんとする努力の現はれざる事は甚だ遺憾の至りであると思ふ。

中間階級の生くべき手段は、初づ徹底的エゴイズム及享樂至上主義を排撃して、宏明正大なる天地、何物をも抱括せずにはおかない天地に出ずる道を開くべきである。ブルジョアをして眞に生くべき道、プロレタリアをして眞に生くべき道、それ等が圓融無礙に通じ得る道は、我が眞生の大道より外に全くない事を痛切に感ずる

のである。

エゴイズムをこれ事とし、享樂が一切であるが如く感ずるのは、狭小なる殻に閉じこもつて居るからである。

一度この殻に微細なりとも一個の刀跡を興ふれば、そこから自から殻は崩壊し初める。

力を失なつた者、望みを失つた者は、焦燥によつて自身の目を蔽ひ、耳をふさぐが如くである。それ等の者に最も適した劑は案外手近に容易されてある事を知らなければならぬ。

言葉は古いが宗教より外に凡てのものゝ歸一し得る所

唐澤別時座談會拔書(一)

愚 民 子

毎日雷雨にめぐまれた別時、皆様が眞剣に各自の行く道を突き進んだ強い力、實相寺様、中野様等の見へないのに寂しみを味はいつゝも、遠く朝鮮クンダリから、山口上人の参加された熱心さ、淺野様、邊渡様、黒宮様等の統整への努力、そうした環境に引づられつゝも、上人

はない。それも宗教の理解だけでは何の役にも立たない。宗教の眞隨を生活の上に實現し得るに至らなければ本當の満足は得られないし、又社會を改造し得る力は湧いて來ない。宗教は眞の人間を創る。この人間が多數に現はれる事によつてのみ合理的な改造が成就される。この眞に生きる人々の生活から必然的に社會がよりよき社會へと推移して行く力が生れるのである。

道を切り開いて行く仕事は決して樂な仕事ではない。けれど尊い仕事だ、やりがいのある仕事だ、これに生命がぶち込めるやうになつたらし、めたものだ。

の講演筆記に、私の筆がシブリ勝ちであつたのを、筆記の整理をし乍ら、初めて知るウツケなさ、座談會の一部分を眞生に發表するにも、拔書とせねばならぬ所に私の弱い力が示されて居る。速記術を知らぬ私には、忠實に書かうとすればする丈け抜けて行く。若し問答両者に不

明の点があつたら責任は私です。

○「アナキズムは現實から出發したもので、宗教とアナキズムとは同じものだと思ひます。」

上「現實から出發せないものはない、宗教ミアナキズムとは同じではない、佛教にはアナキズム位の思想は充分持つて居る。然しアナキズムには合掌の世界を持つて居らない。」

○「本當の意味のアナキズム人と、宗教人とは同じである。一は靈的に進み、一は物質的に進んで來た丈ではなからうか。」

上「生活要求を持ち、社會改造の心のある点は似て居るが、宗教の方は總て靈的立場から解決せやうとするから大變な相違である。」

○「常識的に考へるとそう取れるやうに思ふ。」

上「常識をそんな風に扱つてはいけない、一体常識つて何う説明すればよいですか。」

○「常識とは多數の人々に依つて認められるのです。」

上「多數の野蠻人に認められたからつて、文明人には常識としてはそのまゝ受け入れられない。同じ人類でも別時に來る人と來ない人には、かなり高低の差がはげしい。太陽は東から出て西へ入ると云ふが、實際は地球が廻つて居る。それは誰れでも知つて居る。それで

居て、太陽が東へ登つたと云ふ。これは日常生活の上には太陽が登つたと云ふのが常識であり、科學的には地球が廻ると云ふ方が常識である。眞理をキリ開いて行く宗教に理屈を言ふ必要はない。理屈を云はなくてもよい程研究しつくされたところに本當の宗教がある。人間には何故か自己の生存を欲求し向上の生活を願求する。此の要求を滿たすものが宗教である。」

○ 是の要求をキリ開いて行かうとする所に宗教がある。そう云ふことが解るとそれも又一つの常識となる。

私等が眞劍に佛を禮拜する時、大宇宙を觀する、只大自然と云ふ丈ではもの足りないやうに思ふ。大宇宙と云ふ時には時間、空間を通して一切の萬物を皆含んで來る。宇宙の大生命を豫想して之を人格的に見る。即ち私自身も宇宙と離れて居ないが、ありとあらゆるもの一切が、宇宙の中に含まれてくる。皆様に天地も共に一体となり、大宇宙の中に一大活動となつてくる。その大宇宙の中にあるものを、總て客觀的に見ず、主觀、客觀を合した時、大宇宙の全生命が宇宙の人格として成ぜられる。大宇宙の人格が一切の衆生に働くのが慈悲であり、その慈悲の源泉、一切の根元——即ち宇宙の大人格に遙かに南無し合掌する。同じ合掌するにも、此の宇宙的人

格に對する時、眞からの歸命がある。こゝまで來ると繪像木像にあき足らない、眞に宇宙の大本尊に合一しやうとする時、力強い念佛はホトバシる。だがそこまで行けぬ人々は、私達の眼前に現はして見たい、それが繪像となり木像となる。だがそれとて、繪像、木像を通して、宇宙の大生命に合掌するのだから合掌する心持ちで念佛する時も、宇宙の大生命の輝きに合掌する心持ちで念佛する、かくて宇宙の生命が、宇宙的大人格となる。

こゝへ來るに、如來と我れと共にありと云へる、その大生命の外に萬物なし、それが無限の過去から、無限の將來に渡る。それに融合し歸一するが宗教である。然るに、それに自由に働いて行かない所に悩みとモダエがある。それであり乍らも尚ほ、佛に合掌する時、萬物に働く力が生れる。聲丈け高いのが眞劍であるとは云へない。皆様の念佛が眞劍であるか否かは私にはよくわかる。つまり體驗の實感で知る。南無々量光佛——(高聲で申される)——こゝろ唱へ頭を下げる所に、本當に南無する心持ちが、事實の中に現はれてくる。そして自分ながらその莊嚴さに入る。そこまで來ると禮拜の意義がある。如來に南無阿彌陀佛——と一点のスキのない程念佛は通ふ。木魚たゝいて念佛する時、何んとも云へぬ氣分が出てくる。つまり念佛三昧に入るのである。

○ 撃剣でも、初めはバタン——と竹刀のたゝき合ひをするが、上手になつてくると 聲と打ちとが一つになる。自分の總ては撃剣になり切つて居るので、エイツと云ふ聲と氣合が一つになる。猫を追ふのでも小さい聲で「コラネコ」と云ふてもニゲない、大聲で「コラツ」と追へばこそ逃げる。つまり聲と心とが一つになるのだが、その内でも聲が大切だ。心丈けでよいと云ふ人があるが、それ丈けではいけない。「聲は力なり」で「ドツコイシヨ」と老人は腰をかける。「エイツ」と云ふて廣い溝でも飛び越える。

然し高い聲でも念佛は本氣で唱へるところに稱名の實感がある。母の名を呼ぶとは、母その人を呼ぶことである。母が隣りへ行くに、用があつたらお母さんと云ひなさい、何時でも來るからと云つて出だ小供には母が居ないと淋しいから母さんと呼ぶ、すると母は返事をする。その返事をする内はいゝが、お母サンと呼んでも返事がないと不安を感じる。と云ふて小聲でお母サンと云ふたつて駄目だ、それは本當に母を呼んで居らないから。佛は助かりたければ名を呼べと云ふ、それを本氣に呼べばよい。浮氣で呼んだつて駄目だ。貴方等は本氣に呼んで居られるだらうか。

九十九までは疑つて居ても、百分ノ一でも眞剣に念佛を申すなら、その時の心が一返に九十九の疑を破つた世界に入る。疑い深くても、眞實に如來を呼ぶなら、その時の小さい眞實は成長して行く、少しの信もなくは駄目だが、如何に小さいものでもそこに眞剣が有る時はそれは成長する。私自身も本當に反省して見る時、少しの中からもそれが益々高くなり、信仰生活に入つて來たやうに思はれる。

○ 宇宙の生命が、宇宙の人格として現はれる時、それを離れては一切が、生きられない。而もそれが價値ある生命への進みとなる。

○ 私等は過去や未來を考へないで、現在だけを眞實に生るがよい、死んでからのことを余り考へると現在がさうなる。現在から宇宙と一体となれば未來のことがさうでもよい。私等は宇宙の絶對に合掌し、その最高の信念から生きて行く、今から救はれてる人なら未來が救はれるのは當然である。本當に念佛に徹する時は、病氣もせないし、病氣になつても輕くてすむ、喰ふにも困らぬはずである。キリストも「汝何ぞ明日のこころをうれへ

るや」と云ふて居る。明日を心配する位なら、何故今日のこころを心配せないのが、喰はずに死んだものはまだ少い。寧ろ喰ひすぎせない工夫が大切だ。自分には喰ひ過ぎをして、然も喰ふ心配をしてるのは小人の事である。「道心に衣食あり、衣食に道心なし」と佛教では教へて居る。キリストが「汝なんぞ明日の事をうれへるや」と云ふたのもこの心である。孔子も「天徳を予にいたす桓離其れ予を如何せん」と云つて居るが、皆同じ心である。キリストの肉体はハリツケにされたが、キリストの人格は、何人も手を下すことは出來なかつた。信仰の力はこゝにもある。

う め 草

金持が金持を鼻にかける
貧乏人が貧乏を鼻にかける
信者が信者顔を鼻にかける
共にこんな厭やなものはナイ

□

人間は、金の中に居る
金の事を考へる
病院の中に居る、病氣のことを考へる
だから、時には、下界の中から足を抜いて
峻山、雲表に遊ぶことも必要なんだ

吾朋便り

清水市清水實相寺

中村辨康様より

南無阿彌陀佛。御日にかゝつたのは七月初旬でした。あれからメツと御無沙汰になつて居ります。

昨日焼津の赤坂さんなどが見えまして唐澤での御模様なども承りました。大垣は御盛會の由、何よりの御事を存じ上げます。私は其後社會事業方面の事で忙殺されて居りましたが、此節また多少筆や書物に親しくなつて居ります。大正大學の淨土學研究室の淨土學研究會から「淨土學」誌へ何かかけと云ふ事で「宗門信仰の諸問題」と題して少し書きましたが、大ざつぱに書いたので餘りよく出来ませんでした。此頃は「思想よりも生活だ」と云ふ事がしじみと思はれて家庭生活の反省が念願されて居ります。

元來私の中にはよくないひれくれたも

のを多分に持つて居りますが、こんなこゝでは信仰ある者自ら云ひ得る可くもありません。ですが、やる丈はやる云ふ元氣を失つて居ないこと丈は自らかへりみて喜んで居ります。

大阪神戸の道友諸彦へよろしく御傳聲下さいませ。秋も深くなります。沈思にいい時です。どうぞ、呉れくも御健康を御いのりします。御版りに御寄りになりませんか。合掌

北越便り

渡邊とせ様より

此間當地御別時中は誠にいつに變らぬ御慈愛深き御みちびきに預り道友一同いさ熱心に五日間を歡喜にみたまされて終了させて頂きました事をこゝにおくればせながら厚く御禮申上げます。

此度は手前共にも母初め店員三名も隨喜させて頂き御かけ様に其後の日常生活には大變得るさう多く、眞心こめて家の業に勵んで居てくれますので、日數は僅かでしたがとても効果多く、あの内の一人永澤といふ嘗て身体

餘り丈夫でないの等歸つてから私にし申ますに最早や御上人様の御話と承つて御念佛の尊さをきかせて頂いたら、此後は身体等悪くする氣分はありませんと喜んで居ります。そして元氣にみたまされて働いて居ります。

母も歸られてからすつかり若返つて隠居氣分に居ては相濟まぬと、出来るだけの事をやらねばならぬと一生懸命に活動して下されます。

かうしてみんなで慈光裡に日暮しさせて頂かれる幸福さを感謝いたすと共に、此後は只々御念佛精進よりいたし方なく私は心を期して勵むつもりでございますから、御上人様どうぞ此上さきもきびしく御じかりの上御指導のほどを偏に御願申上げます。

只今例會の御集まりから歸つたさうでございます。今夜は四十餘名の御熱心なる道友の御集まりでございまして、緊張味溢る、様な皆さんの御念佛に、自然と引きこまれて、尊く頂きました。あゝから座談會に小熊、杉本、會田の方々も此度清水で御入信下さった竹田様等の

御熱心の御感想やら御体験談やらで大變尊く愉快に又原様より御互の信仰増進上有益なる御話等御座います、さながら一家だんらん様の、なごやかなる楽しい一夜でございました。あとでは手分けして慈光配布の御手傳ひ願つたりして、十時半頃終りました。

只今歸つて早々喜びのみてゐる心もて御上人様に御禮申上ぐると共に當地の近況を一寸御知らせ申上げます。主人は國勢調査のため没頭いたし居りましたので御無沙汰申上げて居りますが、私より代つてよろしく申上ぐる様にこの命令でございます。どうぞ御許し下さいませ。

末筆ながら中野様、御地桑原様、淺野様、馬淵様初め神谷様にも別に御手紙差上げませんがどうぞよろしく道友の皆様方へ御上人様より何卒よろしく御願ひ申上げます。

大垣さきくさへ私の心はおどる様でございます。佐藤の二人がせめて一日でも御参加出来る様にと祈つて居りますが、子供の病氣後故如何ならんと安じて居ります。くだらぬくりこのみきこえとげ

失禮申上げました。
御上人様時節變調のみぎり折角御尊体御大切に御渡りのほど祈りあげ申します。
國勢調査の夜

松坂にて 谷口年泰様より
南無阿彌陀佛。今朝から家を出て松坂へ来てゐます。コロムベーパーを自分で書いて。印刷屋さんへ急いで頂いてゐます。今夜中にはボスター出来上げます。明日はボスターを掲出します。會費を十錢宛頂く事にする考へです。始めての試みですが失敗するかも知れません。

兎に角精一杯努力してゐます。時は十六日午後六時半と決定。十五日は大石にして頂きます。津へお電話しましたが、十四日までは御來客があまりです。か、然し此の上御日程變更も困りますから、十四日はアトリエで御勉強下さつては如何でせうか。未完成で物置のやうですが静かです。

唐澤お別時最後の晩の茶話會席上で道友の發表になつたもの、左に御披露します。

愚民子
唐澤で寒暖計は又上り 佐藤 龜夫
三日目は木魚の音がチト遠い
あか落ちて皆山を下り
蝸や法話の耳に遠くなり
四苦八苦泣いて渡れや時鳥 兒玉常太郎
あの佛の佛さてパイ五本 谷 二三郎
學生は念佛の時風呂に入り
ボテトでも唐澤へ来て花咲かせ
静坐すれば駕が来る我が佛

小栗 利吉
愚痴こぼし泣いて笑つて五十年
今よりは清き生活
四大苦の生老病死解脱して
早く聖壽の數に入りたし
飯田せい子
色も香もめぐみにそひてたまわりと
法は我が身の實さと思ふ
安藤 百重
人知れぬ悩みもいつか解け去りて
今は嬉しきみ光りの中

いくとせが受け我が師の御教への
今日のおうせご又も嬉しき

武居 やえ
もろもろにかたき道よりやすくと
南無阿彌陀佛のすくじす、みて

稻村 久子
師の君の御法の教へ身にしみて
これよりかたき道に進まん

土屋觀道 名古屋より
愈々秋も深くなりました。道友の方々にはその後御變りもありませんが、御伺い申します。

次に私には先月の十九日東京を出で、越後から大垣、神戸、大阪を経て昨夜當地につきました。更に之から佐屋、四日市、大石、松坂、津、名古屋、焼津、清水を経て二十三日頃歸京する予定となつてます。

今までの處、各地ともあまりに久々の事さて集る人も割合に多く、それに心からなる道友の集りの事さて私の喜びはそれこそ限りない喜びでありました。乍然その爲めに殆ど半日としての暇さへ

なかつたので全く眞生の原稿が書けなかつたことは讀者の方々に對して申譯けもないことです。決してく忘れてゐたりなまけてゐたわけではないのですから失禮のほどは御許しを願ひます。

越後の集り、十月二十日から越後の大清水の觀音で五日間の三昧會がありましたが、昨年三日間やつたのが非常に好成績であつたので今年も亦是非と云ふので始められたのです。殊に場所が北越にきこえた名勝の地であるの、時候が丁度秋の彼岸を中心としての集りであるの、相待つて、道友の集りも亦多く、毎日五六十名から七八十名にも及ぶ日が度々でありました。殊に今回の集りには新に参加した人の多かつたの、それによつて念佛の生活者が今日の社會に働かればならぬと云ふ考へが信仰の上から現はれた人の多かつたことは特に私の喜びとするところであります。

二十五日下山してその夜翌日の夜さは柏崎での集りでした。二十七日は柏崎から三四里離れた海岸の高濱と云ふ町に行きました。町長猪股尚生氏の膽入りで

畫は小學校、夜は禪宗の龍善寺での集りでした。吉田喜平氏、小林敏三郎氏等の非常な御靈力もあり、此の地にも新に道友の前途に光をそへた感じがあります。

二十七日の夜行で神谷善之進様も一緒に歸京しましたが、主として眞生の原稿も書きたいの一寸でも子供の顔も見たいからでありました。なつかしき妻の心にも接したいことはもとよりでありました。切符は東京廻り大垣までです。十一時過ぎと云ふの見送りの道友十八九名全く嬉しさ勿体なさで一パイでした。

東京での二日間には全く夢のやうでした。それでも一家の限りなき歡迎は永いつかれも慰まざるに充分でした。それに二十八日の朝九州の立川上人の上京あり、三十日の夜行で大垣まで同行することのできたのは、又此上もない喜びでした。晝夜主として信仰の問題に心から語り合ふことのできた嬉しさ、之また近來にない喜びです。

大垣の三昧、之は先年から御相談に任つてゐたのですが、今度愈々その時が来て、此の會が開かれるやうになつたの

です。常樂寺様の御夫婦の御盡力にもよ
り、桑原様御夫婦はわざ／＼別府の保
養地から御出を頂き、浅野、馬淵の御方
は主として道友の集りに御盡力下さつた
と云ふことです。集る方々も豫想以上の
多勢でした。東京・上諏訪、三河、名古屋、
岐阜、伊勢等の遠方からまで来て頂
いたほどでした。

〔六日の日は朝の間に大垣の縣立工業學
校の生徒に講演、午後は岐阜の方で女子
師範、夜は市役所での一般講演でした。
集る方も多かつたので近頃の社會問題に
ついて可なり語り合つた感じもしまし
た。殊に市役所での集りは四五百の聴衆
が時間以前に一パイとなり、三時間に渡
る長時間を一人の退出者も無かつたこと
は主催者側にも非常の満足な頂きました
ことは私の限りない喜びでした。之には

かくれたる道友の御盡力や、市當局の御
力によるのです。

〔神戸の三昧會、七日から三日間でし
た。秋葉様の御息女の第七回忌記念とし
ての三昧會でした。御夫婦の御發起を神
戸光明會で應援して頂いたのです。之も
亦久々の集りのこととて各地の道友も多
く集つて頂きました。

〔尼ヶ崎と大阪との集りは別して書きた
てるほどの事もありません。たゞ／＼
限らない道友の睦みと云へば充分でせ
う、さりわけて云ふほどのこともないほ
どに毎度打上げた喜びの集りです。乍然
各地とも道友の心に近頃の不景氣や社會
不安に於て一層念佛の必要を感じる人の
多くなつて來たことは此の上もない喜び
でした。 (一九三〇、一〇、一四)

誌代拂込及寄贈者御芳名

金壹圓 岐阜縣 伊藤友三郎様 青木利省様 河合國彌様 東京 舟木なつ様
名古屋 服部たみ子様 金貳圓 東京 矢崎とし子様 金拾圓 名古屋渡部善兵衛様

一七〇〇

(大正十四年八月十三日)
(第三種郵便物認可)

昭和五年十月十八日印刷納本
昭和五年十月廿五日發行

(毎月一回十二日發行) 第九卷第十號

本誌定價

一部 金十錢 郵税共
半年 金六十錢 全
一年 金一圓 全

注文の注意

●講讀希望者は代金を添へて
御申込下さい
●誌代は總て前金御拂込の事
●送金は振替によるのが便利
です

昭和五年十月十八日印刷納本
昭和五年十月廿五日發行

東京市芝區芝公園十四號地九番

發行兼 編輯人 土屋 觀道

名古屋市西區隅田町二一番地

印刷人 百々治之助

電話四(五)二九三番

名古屋市東區鍋屋町二丁目

印刷所 龍山田活版印刷所

電話東(四)二八六・七五五

東京市芝區芝公園十四號地九番

發行所 眞生社

振替口座東京四七二八八番